

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

2011

夏

Vol.79

平成23年

# 木曾三川

## 地域の歴史

木曾川支流・根尾川の上流に  
発展してきた本巢市

## 地域の治水・利水施設

根尾川上流部の利水・むしろだ席田用水と  
まくわ真桑用水の水争い

## 歴史記録

輪中堤の変遷 第一編

わじゅう

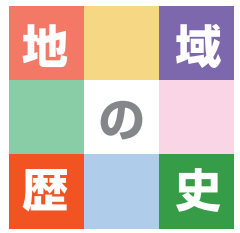
輪中の定義と成り立ち

## 研究資料

伊藤 隆彦

木曾三川を渡ってきた弥富の金魚





# 木曾川支流・根尾川の上流に

## 発展してきた本巢市

根尾川上流に沿って広がる本巢市の中央部本巢地域(旧本巢町)は、地域のほとんどが山地で占められ、根尾川扇状地の扇頂部に集落が発展してきました。近年は、岐阜市のベッドタウン化が進んでいます。

### 本巢市中央部の旧本巢町



麓に多くの古墳が見つかった大平山

本巢市は、岐阜県の南西部のほぼ中央から北端に位置し、根尾川の水源地となつている北部の山間部と、根尾川が平野部に流れて形成した扇状地から成る東西約一七km、南北約四三kmの南北に細長い地域です。北は福井県大野市に、西は根尾川をはさんで揖斐郡揖斐川町・大野町、東は岐阜市、山県市及び関市、南は瑞穂市及び本巢郡北方町と隣接しています。

主要な道路は、市内を南北に縦断する国道一五七号を基軸として、東西に横断する国道三〇三号・四一八号、主要地方道関本巢線、岐阜大野線、岐阜関ヶ原線で骨格を形成しています。本巢市役所からは、岐阜市まで車で二〇分ほど、大垣市までは三〇分ほど、また、名古屋の中心部まで一時間二〇分ほどです。鉄道は、大垣駅(JR大垣駅)



を起点に根尾樽見(所要時間約一時間)に至る第3セクター樽見鉄道が南北に縦断し、住民の通勤・通学など日常の移動手段となっています。

### 先史から古代の本巢地域

本巢地域の東南部の新村地区から、縄文時代の有舌尖頭器や石鏃が発見されています。他に文殊地区から縄文時代の磨製石斧や石槍が見つかっています。弥生時代の遺物は極めて少なく、稲作の伝播によって人々が、採集生活に適した山裾を離れ、平低地に移動したことを表しています。稲作が進み集落が大規模化するに従い、集落間で抗争が起こり、より

を起すことになった。本巢市は、二〇〇四年二月に本巢郡本巢町・真正町・糸貫町・根尾村が合併して誕生しました。本誌では、旧三町一村のうち根尾村については第四五号で特集していますので、今回は本巢市の中央部にあたる旧本巢町(以下本巢地域)を中心に取上げます。



奈良尾神社



八幡神社

大きな地域集団へと変化しました。こうした集団の支配者は、地方の豪族として、より大きな力を持った畿内の勢力である大和朝廷の勢力下に入っていきます。富と力が増大した大和朝廷の支配者は、その強大さを示す大きな古墳を建造しました。やがて支配下に

あった地方豪族もこれにならって古墳の建造を行いました。本巢地区には、大平山の南側丘陵地に宝珠古墳、文殊古墳など六〜七世紀後半

半に築かれたいくつかの古墳があり、中でも文殊古墳は直径六〇m・高さ四mの前方後円墳で、この地域一帯の古墳を代表するものです。文殊古墳の西方の八幡神社裏山古墳は直径三〇mの円墳で前期の古墳とみられます。また、奈良尾神社の裏山には法林寺古墳群があつて、一様に横穴式石室を持つ後期の古墳とされています。

やがて大和朝廷の支配は全国に及び、中央集権的な権力構造を築いていきます。その中で地方は、国・郡・里(後に郷)の制度に組み込まれました。東大寺正倉院に残された戸籍の中に「御野国本簾郡栗栖里大宝式年戸



合併前の本巢郡本巢町

籍」があり、大宝二年(七〇二)時点での美濃国本巢郡の存在が裏づけされています。さらに『和名類聚抄』には本巢郡には八つの郷があったとさられており、そのうちの鹿立郷が、文殊・山口辺りに存在したと『濃飛両国通史』では推定しています。

### 古田織部生誕の地・山口

平安時代から鎌倉時代の本巢地域については、荘園名などの史料は少なく、領主関係はほとんど明らかになっていません。室町時代には美濃国守護である土岐氏やその配下の斉藤氏の勢力が当地にも及んでいました。

戦国時代末期に織田信長が美濃を支配下に収めると、当地は北方城主安藤守就の領地となり、天正八年(二五八〇)守就失脚後には稲葉一鉄の支配下に置かれました。

天文一三年(一五四四)本巢地域の山口城で古田織部重然が生まれています。重然は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えた戦国武将で、武人



山口城址

として戦勲を挙げる一方で、茶人としても頭角を現し、千利休の死後はその後継者として「天下の茶人」と称されました。古田織部が指導して作らせた茶器は「織部好み」と呼ばれ、鮮やかな色彩と歪みを合わせ持つ大胆で斬新な作風が、世界的に大きく評価されています。

### 江戸時代の領主と産業

織豊時代から多くの武将による分割統治下にあった美濃国は、関ヶ原の戦いで西軍に付いた領主が多かったことから、さらに細かく分割されて支配されることとなりました。本巢地域も、代官支配の幕府直轄地・大垣藩領・旗本領などに分割されました。南部の文殊村・法蓮寺村は、織田長孝の領地でしたが、その後加納藩に組み込まれ、さらに文治によって旗本戸田氏領になりました。同じく南部の曾井村は、尾張藩家老石河氏の所領でした。



日置付近の根尾川

### 現在の本巢地域

氏鉄は、領地であった石津郡・大野郡の六ヶ村と、根尾村の領地替えを願い出て許されました。替地の目的は、根尾川流域の森林資源の確保で、さらに木材の根尾川流送に支障のないよう幕府直轄地であった根尾川筋の山口村・佐原村・金原村・河内村・木倉村・神海村・木知原村・奥村を、大野郡五ヶ村と替地しています(注:奥村は現岐阜市)。大垣藩では金原村日当に代官所を置いて、根尾川筋から年間二、〇〇〇間に上る段木(燃料用の薪)を年貢として取立て、大垣城下で使用していました。

また、山口村では豊富に産出する石灰岩を利用した石灰焼きが盛んに行われ、製品は根尾川を川下げして桑名方面に出荷され、田畑の肥料として利用されていました。石灰焼きは、大垣藩の奨励によって山口村農民の農間余業として行われましたが、価格の低下などで休業することもあったようで、明治になってからは他産地に押されて衰微しています。

明治時代になってからも本巢地域の産業は、南部は良質な文殊米を生産する農業が中心で、北部は典型的な峡谷型山村として林業が主体でした。昭和になる頃には、農業が多角化し、畑作や畜産が行われるように

なりました。特にタマネギは土壌が適していたので急速に普及し、現在では特産品として全国に出荷されるようになりました。戦後は、南部で鉄道や道路網の整備によって工場誘致や住宅地の造成が行われ、都市化が進んでいます。また、北部の山間地では、キャンプ場やゴルフ場建設など観光開発が進んでいます。自然環境の保護にも早くから取り組んでおり、昭和四十七年に全国に先駆けてホテル保護条例を制定し、今や県内外で広くホテルの里として知られています。

#### 参考文献

- 『本巢町史 通史編』昭和五〇年 本巢町
- 『岐阜県の地名』平成元年 平凡社
- 『日本地名大辞典』昭和五五年 角川書店



ホテル公園(文殊)



セメント工場(山口)

# 地域の治水・利水施設

## 根尾川上流部の利水・席田用水と

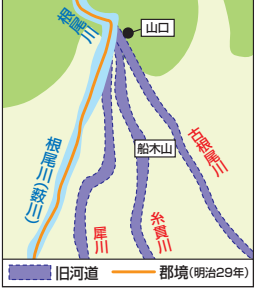
### 真桑用水の水争い

根尾川扇状地は、古くから稲作が進んでいた地域です。しかし、扇状地の水田は多量の灌漑用水を必要としたため、根尾川から取水する席田用水と真桑用水は、開削以来近世まで水争いが絶えませんでした。

#### 根尾川の河道変遷と席田・真桑用水



席田用水(糸貫川)



根尾川流路の変遷

本巢市の北部市境に位置する能郷白山(一六一七m)と越山(二二二九m)の山峡を發する根尾西谷川と、左門岳(二二三三m)をはじめとする北東部山峡の水を集める根尾東谷川が樽見で合流して根尾川となり、峡谷をぬって南下し、山口で平野部に流れ出ています。山間地を流れてきた根尾川は、山口以南の平地に大量の土砂を堆積させて、山口を扇頂として北方町北方(下真桑旧真正町)付近を扇端部とする約八kmにおよぶ緩傾斜の扇状地を形成しています。根尾川は洪水の度に扇頂部の山口に土砂を堆積させるため、もとの流路が塞がれ、新しい流路が生じる河道変遷を繰り返してきました。七世紀頃には本巢郡の東境を流れていたと言われています。(古根尾川)これが平安時代に西に移動して、船木山の南東を通る流路にvari糸貫川(昭和二五年廃川・現在は雑排水用の小水路

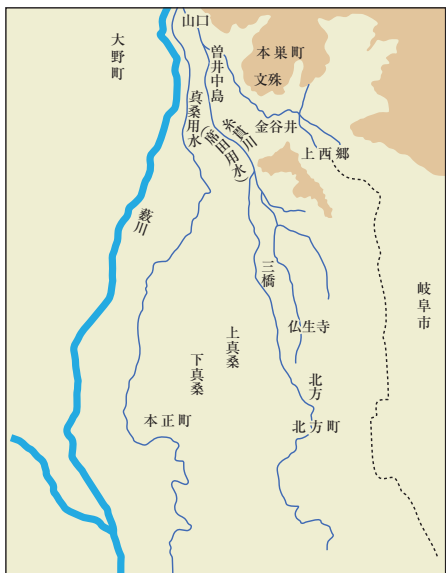
となつています)筋を流れるようになりしました。この糸貫川から引水する席田用水の歴史は古く、成立年代は不詳ながら中世末期にはかなり整備されていたようです。また山口で糸貫川から引水する真桑用水も同時期に開発されていきました。ところが享禄三年(一五三〇)六月の洪水によって、糸貫川の流路が山口で埋まり、根尾川本流は西に移動して現在の根尾川(かつては藪川と呼称)となりました。一説によれば、藪川はもともと真桑用水の水路であったとされ、取水条件としては真桑用水が有利になる河道変遷でした。これまで本流であった糸貫川は流量が激減したため、取水が困難となった席田用水方の村々は、山口で藪川を堰止め、これまで通り糸貫川筋に通水させるように、当時の守護土岐頼芸に願い出ました。この申し出が認められ席田用水方は「一ノ井大堰」を築きましたが、享禄五年(一五三三)真桑用水方が堰を崩

し藪川に水を落とす騒動が起きました。この時は、土岐氏が真桑用水方に堰の修理を命じて落着し、席田用水が「一ノ井大堰」から取水し、真桑用水はその下流で取水することが定められ、席田用水方の優位性が認められました。

#### 席田・真桑用水の水争い

根尾川は水量が豊富な川でしたが、広汎な灌漑地域を担っていたので、旱天が続くとしばしば水不足が発生しました。江戸時代の席田用水は、本巢郡・席田郡・方県郡の四〇ヶ村、高にして二四、七〇〇石余を灌漑する美濃最大の用水で、一方の真桑用水も、本巢郡・大野郡の二〇ヶ村、一三、四〇〇石余を潤す大規模な用水でした。また、その多くが水はけの良い扇状地上にあったことも水需要を大きくし、両用水の対立は深刻なもので、江戸時代に多くの争論が発生しました。

寛永二年(一六二五)は、例を見ないほど旱天続きの年でした。「一ノ井大堰」で取水する席田用水に対して、不利な立場にあった真桑用水の水不足は特に深刻であったため、真桑用水方は、将軍に献上する瓜の灌漑を口実に、席田用水方に水の分配を要求しました。この要求は可児郡姫村の当時の美濃郡代・岡田善同に届き、善同は、席田用水方に水の分配を申し入れましたが、席田用水方はこれ



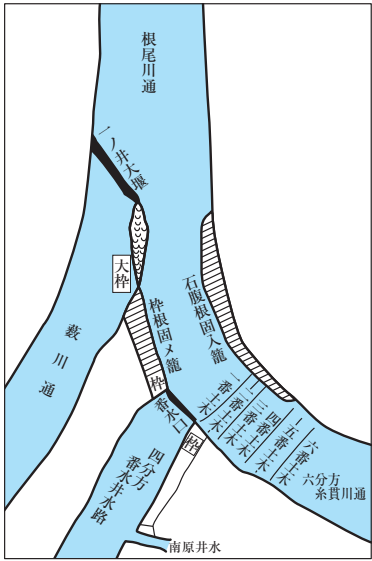
藪川・真桑用水・席田用水の流路

に応じず、慣行通りの取水を続行しました。

寛永一一年（一六三四）にも真桑用水方は、真桑用水方の下真桑村を統治していた当時の美濃郡代・岡田善政に分水を訴え出しました。この訴願はさつそくとりあげられ、真桑方・席田方双方の惣百姓を山口村に招集し、支配領主関係者とともに井堰の実地検証が行われました。席田用水方は、旧来から伝わる数々の証文を持ち出し、これまでの慣行を示して、既得権を主張しました。この争論では、席田用水方が現状通り取水することが認められました。

### 四分六分の分水法

さらに、寛永一四年（一六三七）の早魁<sup>かんばい</sup>で、真桑方は、「一ノ井大堰」から藪川に水を落とすように岡田善政に願い出たので、善政はただちに美濃加納藩主・大久保忠職<sup>ただもと</sup>に申し入れを行いました。席田方では、取水量が年貢の完納率に大きく影響するとして、関係村々から動員して岡田善政のもとへ赴き反論を試みましたが、争論の過程で



一ノ井大堰付近の概況図



真桑用水

善政は新しい用水の分配方法を提示しました。これは、取水量を席田方六分・真桑方四分の定率で配分するというもので、席田方の優先権を著しく損なう内容でした。

驚いた席田方は、今取水している水量さえ、三万石余の田地を灌溉するのに苦慮しており、さらに真桑方に四分の水を与えるなら年貢は完納できない、と率直な反論を行いました。この反論に善政は、従来の慣行は真桑方の条件が悪く公平で無いと真桑方を弁護するにとどまり結論を得ませんでした。

真桑用水からの度重なる訴訟を深刻に受け止めた幕府は、問題に対処するために、検使団を現地に派遣するとともに、現地の領主戸田氏鉄<sup>うじかね</sup>、松

平光重に話し合いで解決するよう促しました。この話し合いは、岡田善政をまじえた三者で行われ、真桑方に四分の水を譲ることで合意しました。

この裁定を実行するため幕府は、寛永一七年（一六四〇）岡田善政と高木家三人衆を検使役として現地に入らせ、席田用水井口の二〇間下流に新溝を掘り、濁水時には席田方六分・二夜一日（二八時間）、真桑方四分・一日一夜（二二時間）とする番水制を定めました。

さらに寛文五年（一六六五）に、双方の番水口の口幅を二三間とするなどが定められたので、両者は形式上も対等となり、席田用水の優位性は完全に無くなりました。

この分水割合は、それぞれが担う石高と対比すると真桑方に有利な裁定でした。この背景には、真桑用水の中心である上真桑村・下真桑村が幕府直轄地で、中でも下真桑村が美濃郡代岡田善政の所管であったことが大きな要素でした。こうして長く続いた席田用水と真桑用水の水争いは終結しましたが、その後は、それぞれの用水内の村々で争論が発生し、水争いは明治に入っても続きました。

### 取水口の統合と幹線水路建設

大正一〇年（一九二一）に始まった木曾川上流改修で藪川の改修工事が

行われ、その中で糸貫川分派口の締め切りが行われました。これによって糸貫川から取水していた用水の新取水口が必要となったので、根尾川の取水口も統合した新しい取水口が建設されました。工事は、藪川に堰堤を新設、統合した取水樋門を糸貫川締切地点に建設し、取り入れた水はいったん貯水池に導流し、分水樋門を通して配分することとしました。幹線水路も新たに建設するなど整備を進め、中世以来の懸案であった水利問題に解決を見ました。



分水口(左に席田方・右が真桑方)

#### 参考文献

- 『本巢町史 通史編』昭和五〇年 本巢町
- 『日本地名大辞典』昭和五五年 角川書店
- 『木曾三川流域誌』平成四年 建設省中部地方建設局

# 輪中の定義と成り立ち



木曾三川下流域の輪中地帯(木曾川をはさんで左が長島輪中・右が加路戸輪中)

## 概要

濃尾平野を乱流していた木曾三川は、犬山を扇頂とする扇状地形と平野の西側が沈降する傾動地形によって形成された地形の上に、我が国固有の気象条件が加わって、出水毎に氾濫を繰り返していたため、古くから洪水と闘いながら地域社会が形成されてきました。扇状地末端からデルタ地帯の低平地に形成されてきた「輪中」もその一つです。

天正一四年(一五八六)の大洪水は、木曾川の河道を大きく変化させ、現在の木曾三川の河道を形成するとともに、加路戸輪中を沈下によって消滅させるなど地域に大きな変化をもたらしました。

江戸時代に入って、幕藩体制の安定した生活環境の下で人口は飛躍的に増加し、これに伴い耕地の確保が必要となったことから、河川の氾濫域での耕地造成が盛んとなり、木曾川下流河川事務所管内(以下「木曾川下流管内」とい

う)でも多くの輪中が誕生し、現在の地形・社会基盤を形成しました。

このような地先を優先した開発は、河川の正常な機能に大きな影響を与えることとなり、必然的に大規模な治水対策が必要となり、明治二〇年(一八八七)に始まる「明治改修」によって抜本的な対策が講じられ現在に至っています。

## 輪中の定義

輪中とは、岐阜県南部と三重県北部、愛知県西部の木曾三川(木曾川、長良川、揖斐川)とその流域に存在した堤防で囲まれた構造、あるいはその集落のことです。

輪中について端的に説明すると、右記のように表現できませんが、その定義は、諸説あって定まっています。「輪中」という言葉が自然発生的であり、慣用的であるため、言葉の意味が多義にわたることは当然といえます。ここでは、諸説ある定義を学問的に検証する場ではないので、

おおまかな定義として次の文を引用しておきます。

「輪中とは、低湿地に存在する集落と農地を包含する囲堤をもち、水防組織体をつくり外水および内水を統制する治水共同体、またはその存在する範囲をいう。要約すれば、水防を媒体として結ばれた村落共同体であり、またそれが成立している地域をいうことになるが、輪中としての必須条件は、①囲堤をもっていること、②集落と農地を包含していること、③水防組合を組織して水の統制をしていることなどであり、①②のような形態と③のような機能を兼ね備えていることが必要で、見かけ上ではなく、構造的にとらえなければならぬ。」

〔輪中―その展

濃尾平野の西部地域は、木曾三川が乱流して伊勢湾に注ぐ低湿地帯で、古代より人々は、集落や耕地を水害から守るために堤防を築いてきました。江戸時代には、地域を堤防で囲んだ「輪中」を形成して水田を開発しました。

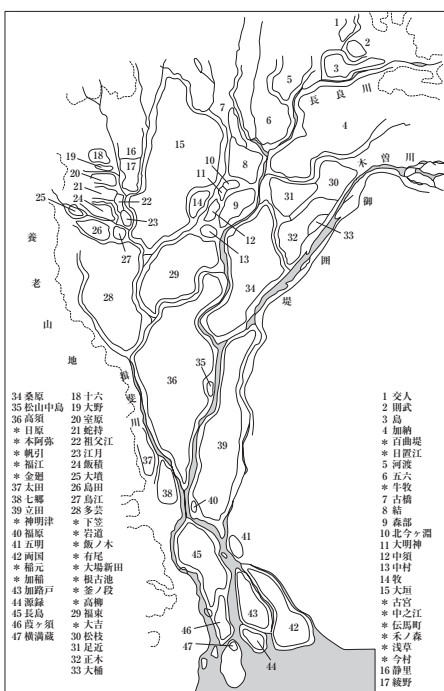
開と構造」安藤萬壽男

開と構造」安藤萬壽男(そうかつまひ)

水防の必要のない部位に堤防がなくとも、輪中といつて差し支えありません。また、水防組合が明治期の水利士功会のような公的機関だけを指すものではありません。

## 輪中の分類

輪中が存在している地形上の特性を指標として、安藤萬壽男は、①扇状地地域の輪中、②自然堤防・後背湿地地域の輪中、③デルタ地帯の輪中



明治の三川分流工事直前の輪中分布図

の三つの類型に大別できるとし、木曾川下流管内の上流部に位置する高須輪中は、類型の②、③に属するとしています。この類型区分によって木曾川下流管内の輪中を区分すると、上流部の輪中では類型②または③に属し、河口に移行するに従い類型③に属する輪中となります。一般的に木曾三川の輪中として理解されている輪中は、高須輪中より上流域の輪中であって、これらの輪中は類型①および②に属しています。このように同じ輪中であっても地形上の特性から性格が大きく異なります。従って木曾川下流管内の輪中は上流部の一般的な輪中と性格が大きく異なっています。

#### ①扇状地地域の輪中

濃尾平野の開発過程において、沖積平野に限定して見ると、まずは扇状地が開発されています。条里制の施行も扇状地に展開しています。その扇状地でも扇端部は湧水による湿地ができるので、その地域については輪中が形成される場合があります。扇状地地域の輪中としては、長良川扇状地に則武輪中・鳥輪中が、牧田川扇状地に室原輪中・飯積輪中などがあります。

#### ②自然堤防・後背湿地地域の輪中

自然堤防・後背湿地地域では、自然堤防を利用して開発が進みました。



自然堤防・後背湿地の輪中堤(立田輪中)

自然堤防である最高部位に集落が形成され、それに次ぐ微高地が畑地になり、つぎに低い土地に水田が作られていきました。しかし、後背湿地のほとんどは開発されず、沼や湿地として残っています。この状態においては、広い後背湿地が遊水地の役割を果たすので、堤防をもたない微高地であっても洪水時に水位が大きく上がることがなく生活できた要因となっています。この段階で荘園時代を終え、近世の後背湿地開発に入っていきます。なお中世に成立していた村は、こうした微高地にできた集落であって、部分堤をつくっていた村はありますが、輪中として成立していたものではありません。

近世には安定した社会状況から、人口の増加とともに新田開発が盛ん

となり、この地方では、後背湿地の開発がその中心となりました。遊水地の役割を果たす後背湿地を開発するために、人工堤防によって水防を図る必要性が生じ、輪中の成立に向かっています。

この地域に該当する輪中は、加納・河渡・五六・牛牧・古橋・松枝・足近・正木・大浦・桑原・森部・大明神・北今ヶ淵・中須・中村・牧福原・大垣・禾ノ森・今村・静里・室原・飯積などがあります。(室原輪中・飯積輪中は一部扇状地地域に入ります)

#### ③デルタ地帯の輪中

デルタ地帯は、陸化が新しいこと、高潮をうけることから自然堤防があまり発達しておらず河道も安定していることから、輪中の規模が大きく、形成された時代も新しい。

高須輪中と立田輪中は、自然堤防・



デルタ地帯の輪中堤(加路戸輪中)

後背湿地地域とデルタ地帯の組み合わせになっています。高須輪中では今尾と東江村日原を結ぶライン、立田輪中では葛木と宮地を結ぶラインの、それぞれ北側が自然堤防・後背湿地地域、南がデルタ地帯です。根占地・本阿弥・長島・五明・葦ヶ須・加路戸・源緑・加積輪中などが含まれます。

デルタ地帯の輪中には、従来の生活圏を堤防で囲んだ輪中の他に、これまで人が住めなかつた砂洲を築堤によって干拓した干拓輪中があります。干拓輪中の拡大は、一つの三角州の中では、上流部から下流部に向けて、既存の堤防を借堤して鱗片状に、逐次、新田が開発されていきました。

### 輪中の成立年代

江戸時代に入ると、濃尾平野西部の美濃国は水害が次第に多くなりました。その一因は、慶長一四年(一六〇九)に、犬山から弥富辺りまで約五〇kmの木曾川左岸に築造された「お囲堤」で、木曾川は左岸への流路(分派川)を無くし、河道を固定されました。以降、木曾川の洪水時は木曾川右岸の美濃側を流下すること



お囲堤

は「新田」と呼ばれています。

## 消えていった輪中堤

江戸時代に築造された輪中堤は、明治改修などの河川改修によって、より大きな地域にまとめられ、堤内に残された輪中堤の多くが、戦後の土地改良などの過程で取り壊されていきました。しかし、昭和五十一年九月洪水で、長良川堤防が安八町大森地先で破堤し、安八町・墨俣町一帯が濁流に浸かりましたが、輪之内町は旧輪中堤



浸水をまぬがれた輪之内町

## 居住区による分類

道の固定化が進むなかで、高位部の既開発部の水防のための輪中形成が扇状地末端まで及んできます。また、干拓輪中の海側への拡大が始まってきます。

④ 一八〇〇～一九〇五年

江戸時代末期から明治時代にかけては、より高位部の輪中化が進み扇状地が含まれる割合が多くなります。海岸部での干拓輪中の拡大、合同が進みます。

輪中の成立過程の分類としては、居住区により分けることができます。

一つは、河川の堆積作用によって形成された微高地に居住し、そこに「尻無堤」を築造して洪水の直撃のみを防除する時代から、地域全体を取り巻く「懸廻堤」による完全な輪中へと推移している輪中があります。この典型的な輪中の成立過程をもつ輪中は扇状地末端の輪中に多く、デルタ地帯の輪中では少なくなっています。

もう一つは、輪中内に居住地がなく、輪中が出来上がり、その後、輪中に居住を始めた輪中です。これはデルタ地帯の輪中に多く、扇状地末端の輪中では少なくなっています。

この形の輪中は、既存の輪中の住民、または、遠方の住民の資金によって既存の輪中堤に接続して開発された輪中であって、多くは「付新田」また

### 参考文献

- 『木曾三川流域誌』平成四年 建設省中部地方整備局
- 『輪中—その形成と推移』昭和六三年 安藤萬壽男
- 『輪中—その展開と構造』昭和五〇年 安藤萬壽男編
- 『輪中と治水』平成二年 岐阜県博物館

になりました。

今一つの要因は、自然堤防・後背湿地地域の最低位部や三角州にかけて始まった輪中の形成でした。輪中が形成される以前の濃尾平野西部は、木曾三川が自由に乱流し、大洪水によってしばしば流路を変えていました。しかし、後背湿地を開発する輪中が形成されると、遊水地が減り、河道が狭まりつつ固定されていきます。一つの輪中が完成すると、その地域の洪水の流下は阻害され水位が上昇するので、近隣地では水防条件が悪化します。水害の増加は、輪中の形成を促進させることになり、低位部から始まった輪中の形成は、より高位部に波及し、輪中地帯を拡大させていきました。この上流部への輪中形成の拡大は、一六世紀には扇状地末端部に及び、最終的には扇状地まで及びました。

こうして形成された輪中は、自身の堤防を残しつつ、周囲の未開発地を新たな輪中として拡大したり、他の輪中と合同してより大きな輪中を形成しました。この結果、外川や海に面する大きな輪中堤の中に、小輪中の堤防が内包された形状が形成されました。

① 江戸時代まで

自然堤防を中心とした微高地に、集落が発達していました。中には部分的な人工堤防を持つ村もありまし

た。河口部の三角州でも自然堤防的な微高地が形成され、集落が発生していました。三角洲は、海に接近しているから、自然堤防・後背湿地地域ほど洪水時に水位が上昇しないので、人工の堤防がなくても生活することができました。もちろんその区域は三角洲地帯のごく一部に限られていました。

輪中を形成させるためには、高くて強固な堤防と輪中内の不要な水を堤外に排出する樋樋の設置が必要でした。これらは、高い技術と多大な労力を必要とされるため、中世の荘園領主の力ではかかいませんでした。続いて台頭した戦国大名にとっても、戦乱の中で行う土木事業としては困難な規模であったので、輪中の成立は、戦乱が収束し徳川幕府の下で大名支配が確立する江戸時代に入ってからのこととなりました。

② 一六〇〇～一六九九年

江戸時代の前半期にあたり、新田開発が活発に行われ、多くの輪中がこの時期に成立しています。前半は、三角洲での新田開発を目的とした輪中形成が多く、後半は自然堤防・後背湿地の既開発地の水防と、新田開発を目的とした輪中形成が多く見られました。

③ 一七〇〇～一七九九年

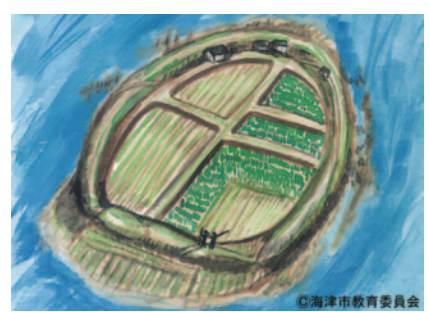
江戸時代の中期は、輪中の成立は少なくなってきました。開発が進み河



①自然堤防



②尻無堤



③懸廻堤

©海津市教育委員会

©海津市教育委員会

©海津市教育委員会



# 研究資料

## 木曾三川を渡ってきた

### 弥富の金魚

弥富市歴史民俗資料館 伊藤隆彦



伊藤 隆彦 氏  
弥富市歴史民俗資料館 学芸員

1965年生まれ  
愛知教育大学教育学部卒業  
昭和63年より愛知県埋蔵文化財センター  
平成3年より弥富市歴史民俗資料館勤務  
共著：新編立田村史通史  
「フィールドサイエンス  
地球の不思議探検 東海版」  
「フィールドサイエンス  
いきいき！生き物観察ガイド 東海版」

#### はじめに

金魚が日本に伝えられて五百年あまりになりますが、以来、金魚は夏の風物詩として日本人に愛され続け、全国各地に金魚産地が発展しました。中でも古くから国内有数の産地として知られる弥富市は、現在、種類の豊富さと生産高で全国一を誇っています。弥富の金魚養殖が始まって百数十年、弥富金魚の発展は、生産者の努力はもとより木曾川下流域の豊かな水に育まれてきたといっても過言ではありません。木曾三川を渡って伝えられた弥富金魚の歩みを紹介したいと思います。

#### 金魚の由来

金魚の原産地は中国で、金魚の出現した時期には諸説がありますが、古くは千六百年以上前の晋の時代にすでに金魚の原種と思われる魚がいたとされています。この魚はフナの大変変異で体色が赤くなった、日本



金魚養玩草

のヒブナに似たものと考えられています。金魚として飼育が始まったのは宋(九六〇)の時代になってからで、明(二三六八)の時代には庶民の間でも飼育が盛んになり、リュウキン、デメキンなどの品種が作り出されました。千年以上の長い歴史をもつ金魚の祖国中国では百種ほどの品種があるともいわれています。日本へ金魚が伝来した時期については、寛延元年(一七四八)に出された金魚の飼育書『金魚養玩草』に、「ある老人の云、金魚は人王百五代

後柏原院の文亀二年、正月廿日はじめて泉州左海の津にわたり」とあり、室町時代の文亀二年(一五〇二)に現在の大阪の堺港に伝えられたことが記されています。最近ではこの記述を日本への伝来時期とする説がほぼ定着しています。本書には、金魚のよしあし、産卵・ふ化の方法、病気の種類や治療法などについて広範囲にしかも詳細に記述されています。再版を繰り返していることから、初版以来長期にわたって本格的な飼育書として活用されていたことがうかがえます。

#### 江戸時代以降の金魚

江戸時代の金魚は一般に高価なものとしてされています。井原西鶴(二六四二〜九三)は、没後に出された『西鶴置土産』(二六九三)の中で、江戸の金魚屋の様子を「しんちう屋の市右衛門とてかくれもなき金魚、銀魚を売るものあり。庭には生舟七八十もならべて、溜水清く、浮藻



浮世絵に描かれた金魚売り

をくれないあぐりて、三つ尾はたらき、詠なり。中にも尺にあまりて鱗の照りたるを金子五両、七両に買もとめてゆくをみて、また遠国にない事なり」と述べています。当時すでに江戸には金魚売りを生業とするものがあり、金魚が大変高価なもので地方にはまだ普及していないことがわかります。江戸時代の金魚生産は、江戸と大阪を中心としていました。前出の『金魚養玩草』が出版された江戸時代中期には、金魚は武士や豪商に好まれ広く知られるようになりましたが、庶民にはまだ手の届かない高価なものだったようです。日本で金魚が庶民に広まるのは、江戸時代後期以降と考えられ、この

ころから浮世絵に金魚売りの姿が描かれるようになります。香蝶楼国貞の浮世絵「俳優見立夏商人」（天保年間）には桶にガラス容器を吊るした金魚売りが描かれています。江戸時代に描かれた金魚の特徴は、金魚を上や横から見たものは少なく、腹から描かれることが多くあります。これは、「金魚玉」とよばれるガラスの金魚鉢に入れ、吊るして下から眺めることが多かったためだと考えられています。

金魚が庶民にも広く普及する明治時代にかけて、弥富だけでなく静岡県焼津地方、熊本県長洲町、岡山市、山形県などでも金魚養殖が行われるようになりました。同時に飼育書も数多く出版され、日本画の題材として好まれるなど、さらに金魚が庶民へ普及していったことがわかります。シブンキン、シユウキン、キンランシなどの品種が国内で作られたほかに、中国からはデメキンが輸入され品種も次第に増えていきました。

大正から昭和にかけて、ツガルニシキ、キャリコ、エドニシキなどの品種が国内で生まれ、戦後にはパール、スイホウガン、ハナフサ、セイブンギョ、チャキン、タンチヨウなど多くの品種が中国から輸入されました。昭和四〇年頃には金魚ブームが訪れ、夏の風物としてうちわや浴衣などに金魚の絵柄が流行しました。

生産者以外の金魚愛好家の飼育も増え、各地でランチュウなどの高級金魚の品評会が開催されました。

### 弥富金魚の歴史と現状

弥富の金魚養殖の歴史については資料が少なく、昭和七年（一九三二）に弥富農業補習学校が調査しまとめた小冊子『弥富金魚』の内容をもとに述べたいと思います。それには、江戸時代末の文久・元治のころ、大和郡山の金魚商人が桑名から船で尾張国海西郡前ヶ須村（現在の弥富市前ヶ須町）に上陸し、名古屋まで行商をしていたところ、前ヶ須村で寺子屋をしていた権十郎がこの金魚を買い、家の前の池で飼育し小売りをしたのが弥富金魚の始まりだとあります。調査当時、権十郎の寺子屋で学んだ人はほとんど故人となっていました。が、存命したわずかに、二人から聞き取ったという内容が記されています。

それによると、明治の初年、権十郎の寺子屋で学び影響を受けた伊藤経介が、郡山から稚魚を買い受け自宅で育てたところ、多くの利益が得られたことから次第に飼育する者が増えていきました。しかし、稚魚を買っていたのでは利益が少ないことに目をつけた佐藤宗三郎が、郡山から産卵・ふ化の技術を習得し本格的な養殖が始まったということです。江戸時代の東海道では、この付近



ふたつやの渡し跡

は桑名から熱田の宮まで船で行く「七里の渡し」が一般的に知られていますが、一方で長い船路を避け、桑名から佐屋宿への「三里の渡し」や前ヶ須（現弥富市）の「ふたつやの渡し」へ向かう短い航路がありました。大和郡山の金魚商人の中にもこのふたつやの渡しを利用する者があり、水の豊かな弥富を金魚の休憩、中継地点としていたと考えることができます。

ここで弥富に金魚をもたらした大和郡山について少し触れてみたいと思います。大和郡山の金魚養殖は江戸時代中期に始まり、藩の奨励もあり下級武士の副業として広まりました。郡山城第三十五次の発掘調査では、武士の屋敷跡から金魚池の跡が見つかり、下級武士の現金収入として飼育が行われていたことが裏付けられています。この金魚池は幕末から明治にかけて人為的に埋められていることから、この頃から農家の副業として水田を利用した本格的な養殖が行われるようになったと考えられています。近年では、経営体数の減少とともに生産される品種も限られ、ワキン（小赤）の生産が主流となっています。

弥富での養殖池の面積は、明治二〇年頃には三町歩（約三ヘクタール）、大正一〇年頃には五〇町歩にまで拡大しました。もともとこの地域では水が豊富にあったことや、水質が金魚の生育に適していたこと、稚魚のえさとなるミジンコが繁殖しやすかったことなどの自然条件に加え、明治二八年（一八九五）には関西鉄道（のちの国鉄関西線、現JR）、昭和八年（一九三三）には国道一号が通るなど、金魚の流通に欠かせない交通の発達によるところも大きいといえます。

明治時代にはすでに海外への輸出も行われていました。明治二〇年

時期	面積	備考
明治20年頃	3町	弥富町
37年頃	10町	同上
43年頃	20町	同上
大正10年頃	50町	他町村含む
明治5年頃	39町6反	弥富町30町2反
11年	30町	弥富町28町
16年	30町	同上

養殖池面積の変遷（弥富町誌より）



金魚のせり市

続の危機に瀕したときには、弥富金魚の衰退は日本の金魚養殖全体に関わる問題だとして、東京や大和郡山など他の産地から協力の申し出があり、親魚を有償で譲り受け苦難を乗り越えたということです。

弥富でも他の産地と変わらず、近年は、都市化に伴い養殖池の減少が目立ちます。平成十二年(二〇〇〇)には養殖面積九八、五ヘクタール(観賞魚全体、以下同じ)が、十年後の同十二年(二〇一〇)には五六、六ヘクタールと三〇%以上の減少、経営体数も同様に一五九から九八と減少しています。特に都市化の著しい平島地区では、区画整理事業とともに後継者問題もあって金魚離れが進み、この十年間で養殖面積は半減しました。

(二八八七)、神戸の商人が前ケ須に来て、三百尾の金魚を買い求め神戸港からアメリカに輸出したのが最初です。当時は、甲板に金魚の入った樽を並べて運搬したため、樽がすべて波にさらわれたこともあったようです。昭和二年(一九二七)に弥富金魚同業組合(内藤守正組合長)の発足とともに、金魚輸出組合(同組合長)が組織され、仲買人を介さず直接輸出されるようになりました。昭和六年(一九三二)には二〇万尾もの金魚が四日市港や名古屋港からおもに北アメリカへ向けて輸出されました。

昭和の戦時下には一時金魚養殖は中断しましたが、戦後復興しました。また、昭和三四年(一九五九)の伊勢湾台風により壊滅的な被害を受け存続の危機に瀕したときには、弥富金魚の衰退は日本の金魚養殖全体に関わる問題だとして、東京や大和郡山など他の産地から協力の申し出があり、親魚を有償で譲り受け苦難を乗り越えたということです。

弥富でも他の産地と変わらず、近年は、都市化に伴い養殖池の減少が目立ちます。平成十二年(二〇〇〇)には養殖面積九八、五ヘクタール(観賞魚全体、以下同じ)が、十年後の同十二年(二〇一〇)には五六、六ヘクタールと三〇%以上の減少、経営体数も同様に一五九から九八と減少しています。特に都市化の著しい平島地区では、区画整理事業とともに後継者問題もあって金魚離れが進み、この十年間で養殖面積は半減しました。

養殖池は、おもに水田の転用で一反(十アール)を数区画に分割したものが多く、共同で敷設した専用のパイプラインから養殖池に水を取り入れていく地域もあります。また自宅近くには、タタキと呼ばれるコンクリート製のふ化用の池を備えています。春の産卵、ふ化から数回の選別作業を経て、夏にはその年に生まれた金魚の出荷が始まります。現在、弥富金魚漁業協同組合管内では国内産のほぼ全品種にあたる二五品種が生産されています。毎週月・水・金曜日の三回、市内に三箇所ある市場で

順位	品 種	数 量	順位	品 種	数 量
1	ワキン(小赤)	6,900	11	セイブングヨ	101
2	リュウキン	1,050	12	キャリコ	95
3	デメキン	750	13	スイハウガン	72
4	コメット	480	14	チョウテンガン	51
5	オランダシシガシラ	350	15	エドニシキ	37
6	タンチョウ	310	16	チョウビ・パンダ	19
7	ランチュウ	281	17	サクラニシキ	16
8	シュブキン	235	*	その他	279
9	アズマニシキ	137	*	すくい用金魚	1,350
10	チャキン	104		合 計	12,617

弥富金魚の品種別生産量(平成22年弥富金魚漁業協同組合調べ) 単位: 千尾

せりにかけられ、年間約一二六〇万尾(平成二三年組合管内)の金魚が出荷されています。かつては金魚桶に頼っていた運搬ですが、昭和三十年代に、ビニール袋に少量の水と金魚を入れ、酸素を封入して段ボール詰めにする画期的な方法が開発されたからは、輸送能力が格段に進歩し、国内の遠方への輸送や海外への輸出に大きな役割を果たしました。

平成六年(一九九四)には、宇宙飛行士向井千秋さんとともに弥富金魚が宇宙へ飛び立ち、宇宙実験に貢献しました。

## おわりに

江戸時代の交通には大きな害となっていた木曾三川ですが、弥富には金魚をもたらすという大きな恩恵を与えました。しかし同じ木曾川下流の弥富の中でも金魚の伝えられた前ケ須やその南の平島地区、芝井地区ではめざましい発展を見せたにもかかわらず、北に位置する鯛浦や五之三地区ではほとんど金魚養殖が行われてきませんでした。この限られた地域での金魚養殖の発展は、地形、地質などの自然条件や地理的なさまざまな要因が重なった特異性を示しているようにも思われます。

今回、金魚について資料館の所蔵資料を中心に多方面から調査を行ってきましたが、まだ調査不足や疑問点も多く残されています。また生産者への取材や映像記録保存の必要性を強く感じているところであり、今後も資料収集、調査を継続していきたいと思えます。

## 参考文献

- 『西鶴置土産』昭和二十七年 岩波書店
- 『金魚大鑑』昭和四十七年 緑書房
- 『弥富町誌』平成六年 弥富町

# 金原の蛇池

きんばら

本巣市金原

昔、金原村にあった蛇池の近くに、佐太郎という鉄砲うちの名人が住んでいました。

秋が深まり、柿が色づいてきたある日の夕方、佐太郎が戸口を見やると、大きな猿が柿を食い荒していました。

このままでは柿を全部食へられてしまうと思った佐太郎は、急いで鉄砲を猿に向けました。

「ひとの柿を盗むな」佐太郎がどなると、猿はあわてる様子もなく、

「わしは、蛇池の主じゃ」とうそぶき、柿を食へつづけます。

あまりの乱暴ぶりに、怒った佐太郎は、ついに引き金を引いてしまいました。

すると、空がにわかに暗くなり、暗雲のなかから、

「佐太郎、なぜ、池の主を撃つた」とどなり声が聞こえます。

「わしは息たえるとも、この恨みは忘れんぞ。これよりのち、お前の家の作物は、きつとカマスにつめる。カマスにつめないと、お前の家が滅びるぞ」

叫び声とともに、猿は蛇に姿を変えて、池に落ちていきました。

それから、佐太郎の家では、代々、田畑で

とれた物は、必ずカマスにつめることにしました。

このしきたりは、先代まで続いてい

ましたが、今では農業を止めたので行われ

なくなつたそうです。

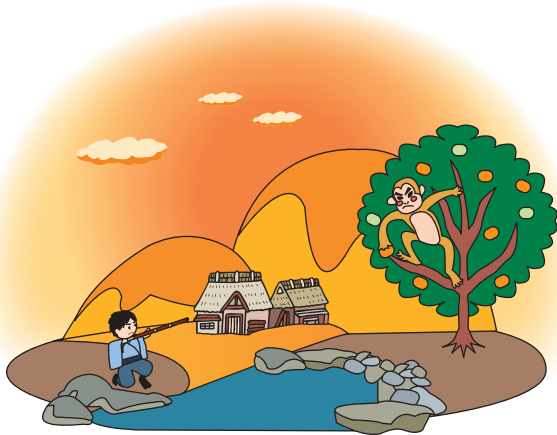
蛇池は、昔より小さくなりましたが、不

思議なことに、雨がどれだけ降つても溢れ

ることがなく、日照りが長く続いても水が

枯れることがないそうです。

＊カマス：むしろを二つ折りにし、縁を縫いとした袋



## 木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》  
午前8時30分～午後4時30分

《休館日》  
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》  
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分  
名神羽島I.Cから車で約30分  
東名阪長島I.Cから車で約10分



木曽川文庫ホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/bunko/index.html>

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原  
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166  
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

### 編集後記

今号と次号Vol.80の2回にわたって、「歴史記録 輪中堤の変遷」の特集いたします。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「根尾川」

山口地先の用水取水堰。席田用水・真桑用水などの統合取水施設。

中

「席田用水」

文殊地区を流れる席田用水。かつて根尾川本流であった糸貫川筋である。

下

「根尾川」

木知原地先。清流・根尾川は、鮎釣りのシーズンには多くの釣人で賑わう。

●訂正とお詫び

弊誌Vol.78の表紙写真「羽根谷巨石積み堰堤」の解説に「デ・レーケの指導によって造られた」としていますが、写真の堰堤は近年造られたものでした。訂正してお詫び致します。